

國學院大學學術情報リポジトリ

行為の経験的分析と社会調査： ラザスフェルドの「社会科学」論序説

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国学院大学法学会 公開日: 2024-05-11 キーワード (Ja): ラザスフェルド, 社会調査 キーワード (En): 作成者: 荻田, 真司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000374

行為の経験的分析と社会調査

——ラザスフェルドの「社会科学」論序説——

菊田真司

1 問題設定

1

アメリカの社会学史が語られるときに、パウエル・ラザスフェルドの名に言及されることは少なくないにもかかわらず、ラザスフェルドがアメリカ社会学に対してなした貢献についての議論は、さほど盛んに行われているとは言いがたい。しかし、第二次世界大戦から一九五〇年代の実証的アメリカ社会学の確立期において、ラザスフェルドが果たした役割は決して小さなものではない。それは、単に『人々の選択 (The People's Choice, 1944)』に代表される実証的な研究の成果が、その分野における研究蓄積の第一歩として重要な意味を持っていたからだけではなく、また、そこで用いられた研究手法が、実証主義的な社会科学方法論に革新をもたらすものであったから、というだけでもない。ラザスフェルドの社会科学の重要な意味は、その研究の組織化の方法、社会科学の制度化のあり方にある。

本稿では、相対的に忘れ去られた戦後社会科学の巨人であるラザスフェルドの社会学に着目することで、第二次世界大戦を挟んだ一九三〇年代の社会科学と一九五〇年代の社会科学を架橋する理念を探求する。この時期は、第二次世界大戦までに、連綿と積み上げられてきたアメリカ社会科学の転型期であり、その転型期にあつて、純粋なアメリカ社会科学の外部から「輸入された」ラザスフェルドがきわめて重要な役割を果たしたことを論証することが、本研究の最終的な目的である。もつとも、前述のように、ラザスフェルド研究が必ずしも充実しているとは言いがたい状況にあるため、ラザスフェルドのアメリカ社会科学史に対する位置づけの再検討は、一朝一夕にできるものではない。本稿は、あくまでもそうした研究の第一歩として、問題の所在とその意義についての素描を行うものである。

ラザスフェルドの社会科学論についての検討を始める前に、ラザスフェルド自身の生涯について簡単にまとめておこう。⁽²⁾ラザスフェルドは、一九〇一年にウィーンで誕生した。父親は法律家、母親はアドラー派の心理学者であつた。ラザスフェルド家には、当時のウィーン知識人が多数出入りして⁽³⁾いた。政治的には、両親ともに社会主義者に親近感を抱いており、パウエルは、オーストリアの社会民主党の創設者の一人であつたヴィクトル・アドラーをはじめとするオーストリアの社会民主主義者と親交のある家庭で成長することになる。そして、こうした社会民主主義に対する政治的な関心は、青年期のラザスフェルドの経歴に大きな影を落とすことになる。

一九二五年に相対性理論による水星の近日点移動に関する論文で数学に関する博士号を取得したラザスフェルドは、ギムナジウムの数学および物理学の教師となることを選択する。数学者あるいは理論物理学者として将来を嘱望されていたラザスフェルドが一介の教師となることを選択した背景には、第一次世界大戦後に成立したオーストリア共和国における階級なき社会を実現するために必要な、若者の教育に対する献身という目的があつたことは、

後に彼自身が語っている⁽⁴⁾。そして、こうした人間関係の中で、ラザスフェルドは、心理学者であるカール・ビューラーとシャルロッテ・ビューラーがウィーン大学で開講していたゼミナールに出席することになる。他方、社会主義者の集会におけるアンケート調査の集計を手伝ったことをきっかけに、調査データの統計的分析の作業を開始することになり、やがてこの両者が結びついていく。

しかし、心理学における統計分析や社会心理学によって大学に職を得ることは、きわめて困難であった。そのため、ラザスフェルドは、企業から資金を集めて市場調査を行う組織である「経済心理学調査研究所」(Wirtschaftspsychologische Forschungstell)をビューラー夫妻の協力の下で立ち上げ、商業的な社会心理学的調査を行う一方で、学問的な社会調査も実施する新たな組織形態を実現した。この研究所での学術的な成果として、成人学校におけるコース選択と職業の関係を論じた『若者と職業 (Jugend und Beruf, 1931)』、社会学者としてのラザスフェルドの名声を高めることに寄与した『マリエンタールの失業者たち』(Die Arbeitslosen von Marienthal, 1933)などがあげられる。

こうした研究の成果が認められ、ラザスフェルドはロックフェラー財団の支援を受けて、一九三三年から一九三四年の間、アメリカにおいて研究を行うこととなった。しかし、その最中の一九三四年のいわゆる二月内乱の結果、オーストリア社会民主党が解散させられる事態となった。帰国すれば、投獄される危険性があると考えたラザスフェルドは、アメリカ滞在を延長せざるを得なくなった。ラザスフェルドは、コロンビア大学の社会学者ロバート・リンンドの支援の下、ニューアーク大学を拠点としてニュージャージー州の若年失業者に対する調査の集計・分析作業、次いで、プリンストン大学におけるラジオ聴取に関する調査の分析作業に従事することになった。そして、一九三七年にラザスフェルドは、このラジオ聴取の研究ごとコロンビア大学に移籍することになる。

コロンビア大学では、リンドの後任として社会学部にポストを得、同時期に着任したロバート・K・マートンとともに、一九七〇年代までコロンビア大学の社会学を牽引していくことになる。この間、ラジオ聴取研究は、応用社会調査研究所 (Bureau of Applied Social Research) と名前を変えて、第二次世界大戦の戦時協力的一端を担うとともに、ラザスフェルドの活動拠点として戦後も重要な役割を担うこととなった。

アメリカ移住後のラザスフェルドの研究領域は、大まかにいって三つのものに分類することができる。まず第一に、経験的な研究である。主要な研究成果としては、ラジオ聴取に関わる研究、投票行動の分析、そして消費者行動論があげられる⁽⁵⁾。ラザスフェルドの経験的な研究は、特定のテーマに対する関心というよりは、人々の心理的な決定のプロセスの解明という点に焦点が当てられているところに共通の特色があり、これらの研究は、心理的な決定要因の分析をテーマを変えて行ったものとみることができよう。第二に、こうした実証研究を支える方法論の精緻化である。ラザスフェルド編集の『社会科学における数学的思考』(Mathematical Thinking in the Social Sciences, 1954) やモーリス・ローゼンベルクとの共著『社会調査の言語』(The Language of Social Research, 1957)、レイモン・ブードンとフランソワ・シャツェルとの共編著『社会学の方法』(Methodes de la Sociologie, 3 Vols, 1965-70) に代表される方法論の膨張は、特定のテーマを超えた実証主義的社会科学の旗手としてのラザスフェルドの影響力を確立することとなった。第三に、社会学の応用をめぐる検討がある。一九六二年のアメリカ社会学会会長演説「経験的社会調査の社会学」(“The Sociology of Empirical Social Research”) を始め、一九六七年の編著「社会学の利用」(The Uses of Sociology) に収められた諸論考は応用社会学と理論社会学の境界を明示し、応用社会学の可能性を提示する重要な著作である。

以下では、これらのラザスフェルドの膨大な学問的業績を貫く問題関心を簡単に整理する。次いで、ラザスフェ

ルド研究の大きなテーマの一つであるウィーン時代のラザスフェルドとアメリカ時代との関係について論じる。最後に、アメリカ社会科学史という文脈の中にラザスフェルドを位置づけ直した際に明らかになる諸テーマについて概説し、アメリカ社会科学史論としてのラザスフェルド研究の意味を素描していくことにする。

2 ラザスフェルドの関心

上述したように、ラザスフェルドの研究関心は、経験的研究にとどまらず、方法論や社会科学的知识の応用にまで渡っている。以下では、これらのラザスフェルドの研究関心について概観を行っておきたい。

ラザスフェルドの関心の中心にあったのは、いうまでもなく経験的社会調査である。明確な方法に基づく社会調査による正確なデータの収集と、推測統計的な手法を援用したその分析が、経験的社会調査の中核である。少なくとも、一九四〇年代から五〇年代にかけて、こうした経験的社会調査のためのデータ収集と分析のための手法の開拓の最前線にラザスフェルドはいたのである。

ラザスフェルドが、そうしたデータの収集と分析のために創り出した技法を逐一解説はしない。ラザスフェルドの高弟の一人であるジェームズ・S・コールマンは、ラザスフェルドの技法上の功績を六つのものにまとめている。すなわち、(1)世論調査を、サンプル調査に基づいて個人の行動に影響を与える因果的要因の推測を行うものに変えたこと、(2)同一のサンプルに対して複数回の調査を行うパネル調査手法の開発、(3)聴取分析・マスメディア分析・マーケット分析の体系的な実施によって、一九三〇年代から四〇年代における社会調査の発展を牽引したこと、(4)サンダスキー研究およびエルミラ研究で、従来の選挙(結果)分析に替わる投票行動分析の手法を開拓した

こと、(5)コロンビア大学での講義および講演によって、現代的な数理社会学を開拓したこと、(6)コロンビア大学応用社会調査研究所に代表されるような、大学に基盤をおく大規模調査組織のプロトタイプを作り出したこと、である。⁶⁾

これに対して、同じくラザスフェルドの影響を強く受けたフランスの社会学者レイモン・ブードンは、ラザスフェルドの選集の序文において、その理論的関心を、行為 (action) の分析、経験的社会調査、方法論、社会学の応用、研究の組織化、経験的社会学の歴史、に分類した上で、それぞれについて、詳細な分析を加えている。⁷⁾ このうち、行為の分析と経験的社会学の歴史についての関心は、密接に関連しており、ラザスフェルドの社会学を理解する上できわめて重要な意味を持っているので、次節で改めて検討することにして、ここでは、それ以外のものについて簡単に触れておくことにする。

まず、経験的社会調査についてである。経験的データを用いた社会分析は、ラザスフェルド以前にも存在している。それらとの違いは、ブードンによれば、第一にラザスフェルド以前の経験的研究が、社会状況の記述を主たる目的とするものであり、現に起こっている事実を明らかにしようとするものであるのに対して、ラザスフェルドの経験的社会調査は、各個人の行為の理由を説明しようとするものであり、心理的な原因から行為に至る因果的な過程を明らかにするものである点にある。もう一つの違いは、それ以前の経験的な調査の多くが公的な統計データや記録に依拠していたのに対して、ラザスフェルドは社会的な問いに答えうるような形で、調査そのものを設計し、データ収集することに重点を置いたことである。

次に、方法論に対する関心である。ブードンは、ラザスフェルドが「方法論」(methodology)と呼ぶものと「技法」(technics)と呼ぶものの区別を強調していたことを指摘する。「技法」は、経験的研究の際に社会学者に

よって用いられる分析の具体的手法のことであり、さまざまな統計的な手法やアンケートにおける質問のさまざまな工夫などが含まれる。これに対して、「方法論」とは、どのようなものであろうか。ラザスフェルドは、それを文芸や音楽の批判的理解と同類のものとして説明している。批判的理解とは、ある言葉の意味に関する常識的な理解を疑問に付し、他の理解の可能性を考察し、それによって新しい理論の可能性を考察するものである。したがって、ラザスフェルドが「技法」のレベルで強調する「原因」を問う技法とは、「原因」という言葉の持つ多義性を解明しようとする試みなのである。他方、例えば統計的な「技法」に関する「方法論」とは、そうした技法が持っている正当性の根拠を明らかにすることであり、その根拠を体系化し、明確化することを意味する。それは、数学的な根拠付けにとどまるものではない。

では、芸術に関する批判的理解と方法論は、どのような点で類似しているのだろうか。ラザスフェルドによれば、芸術批評とは、ある絵画や音楽が「偉大なもの」ととらえられる理由を説明しようとするものであり、批評対象と間主観的な美学的感覚との関係を議論しようとするものである。それは、優れた芸術作品を作成する技術を教えるものではないのである。社会理論における方法論の意味もまた同じである。それは、対象となる研究が、研究の説得性の感覚や検証されているという感覚とどのように関連しているかを明らかにするものなのである。ラザスフェルドは、こうした方法論の意味を次のような形で定式化している。「社会学者は、社会における人間を研究する。方法論者は、研究をしている社会学者を研究する。」(The sociologist studies man in society : The methodologist studies the sociologist at work.)⁽⁸⁾

それゆえ、ラザスフェルドにとって、方法論とは、ある単一の技法を機械的に当てはめるといった類いのものではない。むしろ、複数の可能かつ妥当な因果的解釈を提示した上で、そうした因果的解釈の間の優劣を決定するこ

とが必要とされることになる。また、収集されたデータの間に統計的に有意な相関関係がないとしても、そのことをもってその研究が無意味であるとされるわけではない。むしろ相関関係の不在は、逸脱事例の重要性を示しているのであり、そうした事例の分析によって、新たな解釈枠組みの可能性が開かれるのである。

こうした方法論についての理解は、数量的方法にのみ適用されるわけではない。質的分析においてもまた同様である。例えば、二分法の組み合わせとしての類型論は、ラザスフェルドにとっても重要な意味を持つものであり、数量的な分析と同様に、妥当な因果的推論を導きうるものであった。例えば、「二分法体系の代数学」や「社会調査における質的分析の機能」における分析は、その一例である。

こうしたラザスフェルドの方法論についての考え方の背景をなすものは、直接的に観察可能ではない潜在的な構造をいかにして析出するかという関心である。数量分析においては、文字通り潜在構造分析として定式化される方法の背景にあるものであり、また、類型学的な分析において導き出されるものも、複数の質的な変数の組み合わせとしての、不可視の構造である。その意味において、ラザスフェルドの方法論の目標は、量的・質的双方の経験的方法を組み合わせながら、社会的な行為の背景にある不可視な因果的な構造を探り当てることにあったということができるであろう。

第三に、社会学的知识の応用である。ラザスフェルドは、政治的行動と社会学が直結するものとは考えていなかった。例えば、ラザスフェルドは投票行動の分析に取り組んだけれども、その分析に基づいて、選挙結果を予測することに關してはほとんど関心を持っていなかった。ラザスフェルドが、社会科学の「利用」という言葉で示していたのは、むしろ常識に対する批判的な機能であると、ブードンは指摘している。例えば、ラザスフェルドのラジオ聴取の分析が示しているのは、メディアが世論や消費行動に対して強い影響力を有しているという常識とは異なる

って、その影響は限定的なものであり、身近と感じられるものにしか耳を傾けない、という事実であった。投票行動における分析でも、ラザスフェルドの分析が示しているのは、メディアなどよりも、人的な相互作用の方が決定過程において遙かに大きな影響力を有しているという事実である。つまり、社会学の「利用」の第一の面は、常識による歪みを正すことなのである。

第四に、新たな研究の組織化に対する貢献である。上述のように、ラザスフェルドは、ウィーン時代に経済心理学調査研究所を立ち上げたことに始まり、渡米後のニューアーク大学でも同様の研究所を作り、プリンストン大学でのラジオ聴取の研究所を経て、コロンビア大学で応用社会調査研究所 (Bureau of Applied Research) を立ち上げる。これらの研究所は、いずれも大学と密接な関係を持ちながら、しかし、大学外部の財団・企業・労働組合・政府などの資金によって研究プロジェクトを実施するものである。しかし、こうした制度形態そのものは一九二〇年代から存在している。ラザスフェルドが立ち上げた組織とそれ以前の組織との大きな違いは、後者が個別の研究者の寄せ集めであり、それらの並立的な共同研究という形を取るの⁽⁹⁾に対して、前者が、「研究管理者」(managerial Researcher)の指揮の下、それぞれの分野の専門家に明確な役割が割り当てられ、それによって大規模な調査研究が組織的に行われる点にある。こうした組織形態は、その後の大学附設のさまざまな研究所あるいはシンクタンクにおける研究の原型となつたのであり、その組織モデルを作り出したという意味で、ラザスフェルドの貢献は非常に大きい⁽¹⁰⁾。

3 ウィーンとアメリカの間

上述したように、ラザスフェルドは、いわゆる亡命知識人としての側面も持つており、実際亡命当初は、New School for Social Science と密接な関係を保つていた⁽¹¹⁾。もつとも、ラザスフェルドは、ロックフェラー財団の資金によってアメリカで研究を始めてすぐに亡命することを決意したわけではない。多くの資料が示唆するように一九三五年までは、ラザスフェルドはウィーンに帰る方策を検討していたものと思われる⁽¹²⁾。

同時代の亡命知識人たちの多くがそうであるように、ヨーロッパとアメリカの学問観やそれをめぐる環境の違いは、彼らがアメリカに適応していく上で、大きな問題となったのであり、そうした適応の違いが、その後の亡命知識人たちの足跡に大きな影響を与えていることはいうまでもない。

ラザスフェルドの場合も、同様である。アメリカで比較的順調に適応することができたように見えるラザスフェルドの場合にも、亡命前後において理論的な転換があつたかどうか、そして、それをどの程度アメリカにおける社会学ないし社会科学の状況の影響として理解することができるのか、という問題は、重要である。この点に関して、対照的な考え方を提示しているのが、前述したブードンと、クリスチャン・フレックである。ブードンは、ラザスフェルドがウィーン時代に触れた知的潮流に触れた上で、ウェーバーやジンメルなどに代表される理解社会学とウィーン時代のラザスフェルドの親近性を論じた上で、経験的社会調査 (Empirical Social Research) というアメリカ時代のラザスフェルドの社会科学方法論の中心をなす概念との間の連続性を強調し、「行為の分析」という意味でラザスフェルドの関心は通底していたとして⁽¹³⁾いる。これに対して、フレックは同じくウィーン時代のラザ

スフェルドの方法論の分析を前提としつつ、ラザスフェルドがアメリカへの亡命を決意した一九三五年を挟む一九三三年から一九三七年の時期に、ラザスフェルドの社会科学論の大きな転換を見ている。以下では、両者の議論を整理しつつ、対立の根源がどこにあるのかを検討してみたい。

ブードンは、ウィーン時代を回顧したラザスフェルドの論文を引きつつ、ウィーン時代のラザスフェルドが「行為の經驗的研究 (Empirical Study of Action)」の形成過程とその主要な論敵となつた知的潮流を整理している。上述のように、ラザスフェルドは、ウィーン大学におけるビューラー夫妻の元での社会心理学的調査から、その社会科学者としての経歴を出発させている。ラザスフェルドの社会科学の関心の出発点は、意思決定過程における心理的要因の分析にある。しかし、ラザスフェルドは、当時の心理学の主流の一つであつた行動主義心理学に対して、批判的であつた。心理学における行動主義は、観察できないものに関する言明を科学から排除すべきであるという認識論的な立場の帰結であり、「行為 (action)」ではなく「行動 (behavior)」という術語が採用されるのも、まさにそのためである。後年のものであるが、ラザスフェルドが行動主義心理学を直接に批判した論文「行動科学における概念形成と測定・若干の歴史的觀察」⁽¹⁵⁾では、観察不可能なものを排除するという行動主義心理学の方法的な前提は、そもそも実現不可能であることが、いくつかの事例とともに論じられている。行動主義の出発点であるウェーバー・フェヒナーの法則自体が、「感覚の強度」という仮想的な概念を用いているという点で、観察不可能なものを排除するという前提に反していること、また、古典的行動主義から出発したトールマンが、観察不可能なものを前提することなしには、動物の行動を説明できないという結論に到達した事例や、同じく古典的行動主義者であつたハルが、観察可能な変数の関係を解釈するために不可欠のものとして、観察不可能な媒介変数を導入した事例などによって、行動主義の原理的困難が示されているとラザスフェルドは主張する。しかし、ラザスフェルド

は、当時の心理学のもう一つの主要な潮流である内観心理学 (introspective psychology) のように、観察不可能な要因によって行為を説明することによって、その解釈が恣意的になることにも批判的であった。ブードンの言葉を使えば、ラザスフェルドは行動主義の科学的理念は共有しつつ、行動主義が採用した手段のみを否定したのである。¹⁶⁾

他方、ラザスフェルドがウィーン時代にもう一つ大きな批判的検討の対象にしたのは、経済学的な分析である。経済学的な分析は、経済的利益という単一の動機から合理的に人間の行動を説明しようとするが、ラザスフェルドの考えでは、それは人間の行為の動機をあまりにも単純化したものであり、非現実的なものであった。ラザスフェルドは、同じ状況に対しても複数の反応があり得ること、したがって、人間の行為の動機は、経済的な利害に還元できないことを強調していたのである。ラザスフェルドがこうした知見に到達したのは、マリエンタールの失業分析を含む実証分析の積み重ねによってである。¹⁷⁾ 単一の因果関係によって、人間の行為が説明できないからこそ、回答の類型化によって、諸特徴の重なり合いを理解することが、経験的な分析においては重要であるのである。

ラザスフェルドの「行為の経験的分析」は、一方では、行動主義心理学のように、観察不可能な要素を人間行為の説明から排除するのではなく、人間の行為の心的原因としての動機の説明を目指すものであると同時に、それを、できる限り恣意性を廃した厳密な手続きで行おうとするものであり、他方では、経済学的な分析のように単一の動機に還元するのではなく、動機に関する複数の次元の存在を肯定するものである。

こうした「行為の経験的分析」は、社会現象を個人の行為や信念の集合と見て、その個人の行為や信念を理解することが行為の分析であると考え、理解社会学¹⁸⁾と呼ばれる潮流に非常に近いことをブードンは指摘している。そして、アメリカ時代にラザスフェルドが展開した「行為の経験的分析」とは、理解社会学を統計的な技法を使って

精緻化したものであるとブードンは考えるのである。ブードンは、「行為の經驗的分析」と理解社会学の共通点を、以下のように列挙している。「行為の分析が、あらゆる社会学的分析の決定的な契機であること、巨視的な構造（例えば相関関係）は、理解可能な個人の行為の産物であること、行為の分析とは、行為の背後にある理由と動機を明らかにすることであること、これら理由や動機は、適切な比較の手續きとさまざまな方法論的装置によって、現実には再構成されなくてはならないこと、利害の考慮は、理由のある特定の類型を表すものでしかないこと、行為がこの種の理由によって排他的に動機づけられているという觀念を認めるべきではないこと、など」¹⁹。

このようにしてみると、理解社会学と「行為の經驗的分析」との親近性は明らかであり、したがって、ウィーン時代のラザスフェルドと、アメリカ時代のラザスフェルドは、「行為の經驗的分析」という意味で連続していたと理解することができる。ブードンは主張するのである。²⁰

それでは、次にフレックの議論を検討してみることにする。フレックは、一九三〇年代にアメリカに亡命してきた知識人たちとラザスフェルドの違いを指摘している。ラザスフェルドは、状況に迫られてやむなく亡命してきたのではなく、少なくとも当初は、アメリカでの研究の機会を与えられた少壮の研究者としてアメリカにやってきたのであり、したがって、他の亡命知識人の多くのように、専門家としての高い認知を得ていたり、その分野の代表的な人物と見なされていたりしたわけではないこと、それゆえ、ラザスフェルドは、亡命前の名声ではなく、亡命後に新たに自らの立場を確立しなくてはならなかったのである。この点を踏まえた上で、ウィーン時代と、来米当初のラザスフェルドの議論を比較している。

フレックによれば、ウィーン時代のラザスフェルドにとって重要であったのは、オーストロ・マルクス主義との接触であった。ほぼ一九三〇年に入るまで、ラザスフェルドの社会認識と理論的な説明を支えていたのは、緩い意

味でのマルクス主義であり、その後ビューラー夫妻の心理学の影響を非常に強く受ける形で理論的には転換していることになる。しかし、フレックが指摘するところでは、その後もマルクス主義的な社会認識と実践的な問題意識は継続していたのである。ウィーン時代のラザスフェルドを代表する著作である『マリエンタールの失業者たち』は、一種のアクション・リサーチであり、単にマリエンタールにおける失業者の行動を記述することではなく、それを通じて失業が生み出す社会的問題の解決の糸口を見いだすことがその目的であったのである。²¹⁾ その意味で、ウィーン時代のラザスフェルドは、マルクス主義に影響を受けた強い社会的関心を背景にしていたのであり、科学的な分析それ自体が目的ではなかったことを、フレックは強調している。

フレックは、一九三三年にアメリカに到着した直後に準備された二本の論文に着目している。一つは、「なぜを問うことの技術」(『The Art of Asking Why』)であり、もう一つは公刊されなかった論文「社会誌の原理」(『The Principle of Sociology』)²²⁾である。前者は、ウィーン時代のラザスフェルドが従事した市場調査の方法を記述したものであり、後者は、『マリエンタール』のようなアクション・リサーチとしての社会調査を記述したものである。そして、フレックは、前者がその後のラザスフェルドの経歴を形作っていくのに対して、後者の側面はこれ以降忘れ去られていくことを指摘して、アメリカ時代のラザスフェルドにおける大きな転換を指摘するのである。

ラザスフェルドの社会科学観は、アメリカ亡命に前後して大きく変容したのであるうか。ブードンの議論は、ラザスフェルドの関心の連続性を指摘しているが、ブードン自身が認めているように、ラザスフェルド自身が自らの研究をウェーバーやジンメルと同じ方向のものとして位置づけたことはない。²³⁾ ル・プレをはじめとする経験的社会分析の歴史に強い関心を持っていたラザスフェルドが、自分自身の理論的枠組みについて、より適切な歴史上の系

譜に位置づけることを怠った理由を説得的に説明することは、かなり難しいように思われる。他方、フレックの分析は、ウィーン時代のラザスフェルドの社会的な関心をきわめて強調するものであるが、なぜアメリカにおいて社会誌的な分析方法が受け入れられないとラザスフェルドが判断したのかという点について、十分説得的な説明がなされていない。フレックは、この問題に亡命知識人のアメリカへの適応という意味づけを与えたいように思われるが、そのための分析は十分ではないように思われる。²⁴

しかし、ブードンの見解とフレックの見解は、必ずしも矛盾するものではない。ウィーン時代のラザスフェルドに関しては、まだ不明な点が残されているので、必ずしも即断することはできないが、フレックがいうようにラザスフェルドが実践的な関心を失ったことを意味していない。むしろ、「行為の経験的分析」によって、さまざまな社会的現象の潜在的構造が明らかになることの持つ実践的意味は大きいのではないであろうか。上述したように、アメリカ時代のラザスフェルドが「社会科学の利用」というときに念頭に置いているのは、社会科学の知識をそのまま実践に移すことではなく、むしろ、そうした社会科学の知識によって、常識的な理解に対して疑念を差し挟んだり、その不当性が明らかになることである。ラザスフェルドが持っていた社会的実践への関心は、より学問的に洗練された形で保持されているということもできるであろう。その意味で、理論的にも実践的にもウィーン時代とアメリカ時代は連続しているのである。

4 アメリカ社会科学とラザスフェルド

こうしたラザスフェルドの方法は、二重の意味で当時のアメリカ社会科学にとっては異質なものであった。まず一つは、その分析対象の相違である。確かに、経験的社会科学は、アメリカにも存在していたし、一九二〇年代のシカゴ学派のように、きわめて詳細な分析を行うものもあつた。しかし、それらの分析の対象は、もっぱらコミュニケーションであり、コミュニティの状況を記述することに焦点が置かれていたのである。²⁵これに対して、ラザスフェルドが分析の対象としたのは、個人の行為の原因としての心理的な決定過程であり、数量的な方法を用いつつラザスフェルドが最終的にたどり着こうとしたのは、あくまでも個々の人間の行為の分析であつた。次に、複雑な行為を決定している要因の確定にその焦点を置くことである。それまでのアメリカ社会科学の分析の多くが、記述に焦点を置くものであつたのに対して、ラザスフェルドの分析は社会的行為の「原因」に焦点を当て、それを適切に類型化することを試みているのである。²⁶もちろん、ラザスフェルドの調査においても「いかに」という部分が重要視されることもあるが、それはあくまでも一つの行為をいくつかの行為の連続する「プロセス」に分解することで、原因を明確にするためであり、記述そのものが目的では決してなかつたのである。

こうした分析対象の異質性を正当化すべく、ラザスフェルドは社会調査の歴史に関する多数のモノグラフを執筆している。そこでは、ウェーバー、デュルケーム、ジンメルといった古典的な社会学者による行為理論と、ケテレヤル・プレなどによる行為の数量的な分析がよりあわされて、一つの社会学的理論が構築されるのである。²⁷

このように、経験的社会調査を方法の主軸に据えるラザスフェルドにとって、アメリカ社会科学は、きわめて不満

足なものであった。例えば、一九五〇年代に書かれた、マクロ社会学を論じた小論において、ラザスフェルドは、同時代の社会学的研究の多くが社会分析の記述的伝統の中に埋没してしまっており、明確で検証可能な仮説を提起していないことを厳しく批判している。ラザスフェルドによれば、同時代のアメリカ社会学には、二つの要素が存在している。一つは、ラザスフェルドが「社会分析」と呼ぶものであり、それはせいぜいのところ文学的な価値しか持っていない。⁽²⁸⁾ 他方、社会学的「理論」呼ばれるものがあることを認めていたが、しかしラザスフェルド自身は、この意味での理論にさほど重要性を認めていなかった。ラザスフェルドにとって理論のモデルとなるべきものは、自然科学におけるそれであり、パースンズのような一般理論ではなかった。⁽²⁹⁾ ラザスフェルドがマーソンの「中範囲の理論」に対して支持を与え続けたのも、こうした彼の理論観に由来している。

ラザスフェルドの社会学とは一体何であったのか、という問いに、もう一度立ち戻ることでも本稿を閉じることにしたい。ラザスフェルドの社会学の背景をなしているものは、三つの要素であるといつてよいであろう。第一に、厳密な科学的方法への指向であり、第二に人間の行為を分析する行為理論の視点であり、第三にそうした人間の行為を説明するにあたって必要な社会的な諸要素をすべて考慮に入れるという意味で、総合的社会科学の視座である。ラザスフェルドの社会学は、古典的なヨーロッパ社会学の伝統を汲むものであると同時に、その支流であるアメリカの一九二〇年代の社会科学ともきわめて近接しており、アメリカ社会科学の文脈の中では、一九三〇年代における総合的社会科学と数量的統計的分析との架橋あるいは総合としての意味を持つものであった。その意味で、ラザスフェルドの社会学が、アメリカにおいて広く受け入れられ、大きな影響力を持ったことは、アメリカ社会学の文脈の中から理解することができる。

他方、いくつかの問題も残されている。興味深いことに、ラザスフェルドは、同時代のアメリカ社会学の主役の

一人であるタルコット・パーソンズに関して、ほとんど言及していない。しかし、行為理論に対する着目、ヨーロッパの古典的社会学の収斂傾向の指摘、経済学的・功利主義的社会理論に対する批判的視点、行動主義心理学に対する批判など、多くの点でこの両者には共通する点がある。なぜラザスフェルドは、パーソンズの理論に十分な理解を示さなかったのか、という点を説明することは、一九五〇年代のアメリカ社会科学の動向を考える上で、きわめて興味深い。

第二に、ラザスフェルドの科学観そのもの問題がある。本稿では触れなかったが、ラザスフェルドのウィーン時代は、いうまでもなく、ウィーンの哲学的台頭期であり、後にウィーン学団として知られることになる多くの哲学者たちが、ラザスフェルドの同時代人である。にもかかわらず、ラザスフェルド自身は、ウィーンの実証主義者についてはあまり語ることがない。ブードンが指摘するように、マッハの影響が見られるとしても、ラザスフェルドの科学観の背景については、いまだ十分な説明がなされていない。³⁰ ラザスフェルドの現代社会科学における位置づけを考える場合には、この点も重要であろう。

第三に、コロンビア社会学の問題がある。アメリカの社会科学は、一九三〇年代になると、ウィリアム・オグバーンに代表される厳格な実証主義と、シカゴ学派に代表する素朴な経験主義の両者に対する批判的な態度が表面化しつつあり、その両者と伝統的なアメリカの総合的社会科学との総合を求める努力が行われていた。タルコット・パーソンズの処女作である『社会的行為の構造』(The Structures of Social Action) は、そうした一九三〇年代におけるアメリカ社会学の動向をもっとも端的に表している。同時代のコロンビア大学においても、同様の傾向を看取することができる。当時のコロンビア大学の社会学部の中心は、ウェーバーやジンメルなどの理論を摂取した『社会』などで知られるロバート・マッキーバーと、社会誌的な分析を得意とし『ミドルタウン』研究で知られる

ロバート・リンドという二人の対極的な社会学者によって構成されていた。その両者が後継者を選ぶ際に、リンドはラザスフェルドを、マツキーバーはすでに優れた理論家として知られていたマートンを選んだのである。そして、ラザスフェルドとマートンは、応用社会調査研究所を舞台に「あり得そうもない協調 (improbable collaboration)」とマートン自身が呼んだ⁽³¹⁾緊密な共同研究を展開していくことになる。上記のようなアメリカ社会科学の動向と照らして、マートンとラザスフェルドの共同作業を可能にした要素は一体何であったのかは、改めて検討する必要があるであろう。そして、ラザスフェルドの重要な貢献である新たな社会調査の組織の持つ意味は、そうしたラザスフェルドの社会科学観との関係で、考える必要があるであろう。それが、次稿の課題である。

(1) 重要な社会学者であるにもかかわらず、ラザスフェルドの研究は、数えるほどしか存在していない。しかも、本格的な研究といえるものは、管見の限り皆無である。ラザスフェルドの生涯および業績についての比較的まとまった研究としては、Raymond Boudon, "Introduction", in id. (ed.) *Paul F. Lazarsfeld On Social Research and Its Language*, Chicago University Press, 1993, pp. 1-29 がある。また、個人的な回想を含めたラザスフェルドに関するさまざまな文書を集めたものとして、Jacques Lautman et Bernard-Pierre Lécuyer (dir.), *Paul Lazarsfeld (1901-1976) : La sociologie de Vienne à New York*, Editions L'Harmattan, 1998 がある。ラザスフェルドの著作に関しては、Boudon, *op. cit.* 卷末所収の "The Writings of Paul F. Lazarsfeld" が網羅的である。

(2) 以下の記述は、Boudon, "Introduction" および Lautman et Lécuyer, "Presentation", in id. *Paul Lazarsfeld (1901-1976)*, pp. 9-19 に依拠してゐる。

(3) ラザスフェルド家の人的な交流については、十分な研究がなされていない。ラザスフェルド自身が語っているところを別にすれば、さまざまな資料から断片的に推測されるだけである。心理学者のアルフレード・アドラーとは、かなり親密な交流があり、ラザスフェルドの行為論にも影響を与えていると考えられる。また、オーストリア社会主義の代表的な人物であるオットー・パウアーとも近い関係であったと思われる。その他、ほぼ同年代であったオスカー・モルゲンシュタインとはおそらくウィーン時代

から交流があったものと思われる。また、ウィーン学団に属する哲学者の中では、オットー・ノイラートとルドルフ・カルナップとは面識があったようである。ウィーン時代のラザスフェルドについては、Christian Fleck, “The choice between market research and sociology, or What happened to Lazarsfeld in the United States?”, in Laumann et Lécuycr, *Paul Lazarsfeld (1901-1976)*, pp. 83-119。オーストリア社会主義者との交流については、“Discourses on society in «Red Vienna»: Some contexts of the early Paul F. Lazarsfeld”, in Laumann et Lécuycr, *Paul Lazarsfeld (1901-1976)*, pp. 33-48 が比較的詳しく。

- (4) Paul Lazarsfeld, “An Episode in the History of social Research: A Memoir”, in *Perspectives in American History*, No. 2, pp. 270-337 を参照。
- (5) それぞれ、主要なものとしては、Laumann et Lécuycr, “Présentation”, in id. Paul Lazarsfeld (1901-1976), pp. 9-19 などがあげられる。
- (6) James S. Coleman, “Introduction”, in Patricia L. Kendall (ed.), *The Varied Sociology of Paul F. Lazarsfeld*, Columbia University Press, 1982.
- (7) Boudon, “Introduction”, *op. cit.* なお、以下の記述は、基本的にこの論文に基づいてる。
- (8) “Problems in Methodology”, in Robert K. Merton, Leonard Broom and Leonard S. Cottrell (eds.) *Sociology Today: Problems and Prospects*, Basic Books, 1959, pp. 39-78.
- (9) もちろん、研究を代表する役職もあるし、著書を出版する場合には編者も置かれる。しかし、対等な研究者の共同研究である場合、いずれかの研究者の関心にしたがって、全体をコントロールすることは、非常に困難であったし、研究者自身も消極的であった。筆者は、別稿で一九二八年の大統領特別委員会におけるリーダーシップの欠如を分析したことがある。拙稿、「社会科学の知識の実践性をめぐって―社会動向に関する大統領特別委員会」と一九二〇年代の社会科学」、「國學院法學」、第四八巻第四号、一〇一七ページ参照。
- (10) この点についての詳細な分析は、別稿を期したい。
- (11) 亡命知識人とアメリカ社会学をめぐる問題に関しては、矢澤修次郎、『アメリカ知識人の思想―ニューヨーク社会学者の群像』、東京大学出版会、一九九六年をまずあげるべきであろう。ただし、ここで触れているように、ラザスフェルドを通常の意味の亡命知識人として扱うことは、やや無理がある。なお、亡命知識人がアメリカに与えた影響全般に関しては、ルイス・A・コー

- ザー(荒川幾男訳)、「亡命知識人とアメリカーその影響と経験」、岩波書店、一九八八を参照。
- (12) この点については、Fleck, "The choice", *op. cit.* を参照。
- (13) ブードンの見解については、Boudon, "Introduction", *op. cit.* または Boudon, "L'analyse empirique de l'action» de Lazarsfeld et la tradition de la sociologie comprehensive", in Lautman et Lécyer, *Paul Lazarsfeld (1901-1976)*, pp. 364-382.
- (14) Paul Lazarfeld, "Some Historical Note on Empirical Study of Action", BASR.
- (15) "Concept Formation and Measurement in the Behavioral Sciences : Some Historical Observations", in Gordon J. Di Renzo (ed.), *Concepts, Theory and Explanations in the Behavioral Sciences*, 1966.
- (16) Boudon, "Introduction", *op. cit.*, pp. 8.
- (17) ブードンは、ブドラーによって、心理学的な知識を得ていたことも、こうした見解に影響していると考えている。*Ibid.*, pp. 8.
- (18) ここで「理解社会学」とブードンが呼んでいるのは、ウェーバーやジンメルによって展開された議論であるが、その中核をブードンは次のように整理している。「(1)社会現象は、個人の行為の産物であり、集合的行為や集合的信念は、個人の行為や信念の集合である。(2)行為は理解されなくてはならない。つまり、行為の行為者にとつての意味、いいかえれば、行為者が自らの行動を是とする理由が、理解されなくてはならない。」*Ibid.*, p. 8.
- (19) *Ibid.*, p. 8.
- (20) フレックの見解については、Fleck, "The choice", *op. cit.* を参照。
- (21) フレックは、この点をラザスフェルドや当時の共同研究者からのインタビューによって論証しており、その限りにおいては説得力がある。
- (22) したがって、この解釈にしたがえば、『マリエンタールの失業者たち』の副題に含まれる「社会誌(sociography)」という言葉には、特別の意味、すなわち問題の記述だけでなく、その解決も視野に入れた分析という意味が含まれていることになる。
- (23) Boudon, "Introduction", *op. cit.*, pp. 8.
- (24) Fleck, "The choice", *op. cit.* この辺りのフレックの記述はあまりに性急であって、十分な論証がなされているとはいいがた¹⁾。
- (25) Boudon, "Introduction", *op. cit.*, pp. 8.

- (26) Boudon, "Introduction", *op. cit.*, pp. 8.
- (27) 例えば、Boudon, "Introduction", *op. cit.*, pp. 8. などがその代表的なものであろう。
- (28) その代表格が、チャールズ・W・ミルズである。
- (29) 後述するように、パーソンズに関してラザスフェルドが直接語ったものは、存在していない。ラザスフェルドの理論観については、Boudon, "Introduction", *op. cit.*, pp. 8. を参照。
- (30) マツハの経験主義の影響をどの程度見積もるかは、ウィーン時代のラザスフェルドの理解にとつては、重要である。
- (31) マートンから見たラザスフェルトとの関係については、Robert K. Merton, "Working with Lazarsfeld: Notes and contexts", in Lautman et Lécuycr, *Paul Lazarsfeld (1901-1976)*, pp. 163-212. 応用社会調査研究所における研究については、Terry N. Clark (et al.), "Paul Lazarsfeld and the Columbia Sociology machine", in *ibid.*, pp. 289-360. をそれぞれ参照。

(三) の研究成果の一部である。) (本研究は、科学研究費補助金・基盤研究(C)「ラザスフェルドと第二次世界大戦後のアメリカ社会科学」(課題番号二三三三〇一六